

改訂版 発刊によせて

根拠に基づく医療（evidence-based medicine：EBM）が浸透し、進歩し続ける医療技術を適正に利用することの必要性からガイドラインが生まれ、近年、厚生労働省の後押しのなか、わが国の各種学会や研究会、団体において、さまざまな疾患や病態のガイドラインが作成されるようになった。結果、今やまさに百花繚乱の如く多数のガイドラインが刊行される状況になっている。しかし、これだけ多くのガイドラインが世に出てきても、種々の症状や厄介な合併症、さまざまな社会的背景や多種多様の希望を有する目の前の一人一人の患者さんに、いったいどれほどの“ガイドライン通りの治療”が施せるであろうか。

本書の初版は、必ずしもガイドライン通りの治療が行えない患者に対して、どのように病態を捉え、どのような治療を行えばよいのかの道すじを教えてくれる、そんな「痒いところに手が届く」臨床現場の実践書として大いに好評を博し、発刊から4年半経過した。

この数年間でガイドラインを取り巻く状況はさらに変化した。すなわち、現場の医療者は診療ガイドラインを金科玉条の如くに奉り、ガイドライン通りの治療を行わないと外道のような扱いを受けたり、ガイドラインから外れるような治療があたかも犯罪行為のように批判の対象になったりされるようになった。目の前の複雑な病態や状況にある患者さんに対して、“ガイドライン通りの治療”を行えないからといって、治療を放棄することすら起きているのである。恐るべき事態である。その一方で、患者を取り巻くさまざまな状況を鑑みたり、病態を深く考察することもないまま、ただ無思慮に“ガイドラインをなぞるだけの治療”が横行していたりもする。憤りを禁じ得ず、ガイドラインの弊害とも言える。

私事で恐縮だが、私自身、日本臨床腫瘍学会のガイドライン委員長を拝命して複数のガイドライン／ガイダンスの策定に関与し、大腸癌研究会、日本胃癌学会でもガイドライン委員に名を連ね、『大腸癌治療ガイドライン』や『胃癌治療ガイドライン』作成に関与している。そんな関係もあって、いわゆる診療ガイドラインの社会的意義や臨床現場における治療指針としての重要性は人一倍理解しているつもりである。そんな私でさえ、昨今の“ガイドライン偏重主義”と、それと表裏一体の“ガイドライン通りにやりさえすれば良いのでしょ的薄っぺら主義”には心底辟易している。

上記状況のアンチテーゼとして、そして、消化器がん治療の真髓をお見せしたいという義侠心から、本書をバージョンアップさせる必要があると痛感し、改訂版を発刊することとした。本書には私自身のそんな熱い思いが込められており、認識を共有しているたくさんの仲間たちによって執筆、編集が行われた、時宜を得た珠玉の一品である。熟

読していただくとわかると思うが、どんな患者さんに対する治療も、そしてその治療に至る考え方も、結局、EBMやガイドラインが基本になっているという点である。まさに我が意を得たりで、執筆にご尽力いただいた消化器がんの臨床腫瘍医、ならびに共同編者の加藤 健先生、池田公史先生に深謝する。また、第2版発刊にあたり、鈴木美奈子さん、溝井レナさんはじめ羊土社の方々に大変助けて頂いた。この場を借りて御礼申し上げます。

本書を、真摯に魂を込めて消化器がん治療に取り組んでいる若手臨床腫瘍医ならびにメディカルスタッフに捧げます。

2015年 3月

編者を代表して
室 圭